

## 虹の深く

お茶を味わって山いっぱい桜を愛で、虹の深くで世の中の賑やかさを見届けて。

——前書き

初めて『源氏物語』に出会ったとき最も印象深かったのは恐らく無意識にまたはわざと登場する女性の数々です。徐志摩先生の「あの頭を下げたやさしさは、水蓮の花が涼風に堪えずはにかむよう」で形容したいと思います。川端康成がノーベル文学賞受賞講演で、「少年の私が古語をよく分らぬながら読みましたのも、この平安文学の古典が多く、なかでも『源氏物語』が心におのずからしみこんでいると思います」と語っています。

四世代を経て、七十数年にまたがり、栄華と贅沢三昧、腐敗と淫乱を書き尽くした物語。紫式部の言葉遣いで、女性達の顔や声が紙上にありありと現れ、賢くて利発でも天寿を全うできない者、寝所で一人きりの生ける屍、剃髪して遁世する物、墓へ踏み込み幕を下ろす者。怒っても争わない悲しみは、何年も経ってから読み返しても変わりません。環境と心境が変わるにつれ、「吉」と「凶」でこの女性達の運命をくくることはなくなりました。光と影が交錯し、物欲が強く、彼女たちが幸せでなかったと言えるでしょうか。喜びがなかったと言えるでしょうか。こうなっては評価する必要はないので、是非を語らず一人一人の「ハムレット」の味わいを残しておきましょう。

気楽に『源氏物語』を開いたとき、明らかに作中で描かれた時代と作者のいた時代いずれもが中華文化と複雑に入り組んだつながりを持っていることに気づくでしょう。白居易の詩歌、唐錦の風靡、舞楽の繁栄など、中日の文化の友好的な交流を実証しないものはありません。外来文化の吸収と改造を通じ、日本は次第に「唐風文化」から「国風文化」への移行を実現しました。

遣唐使、鑑真の来日など真実の歴史上のできごと、両国間の友好的往来の痕跡を、古今を通じて実証しています。また作中では多くの人物が生活のままならないとき、「人生無常」、「四大みな空なり」といった仏教観をよくつぶやいています。彼らは時々「仏門に帰依する」ことが正しい道で必然であり、俗世を離れて、苦しい境遇を抜け出した最後の落ち着く先だと考えます。ほかに、作中は人生の八苦、愛する者と別れる苦しみ、求めでも得られないといった仏教思想があふれており、鬼神の話まで出てきます。中日両国の学び合う文化の多様さ、深さにどうしても感嘆してしまいます。

機会があったら春の花咲く頃に日本へ飛んで、街角で桜を愛で、茶室を訪ねてひとときを過ごし、リラックスしてみたいと思っています。往来が盛んでにぎやかな、贅沢で享乐的な大都市よりも、北海道の温泉や京都の小道が続く閑静な地のほうに心が動きます。大唐に回帰する夢さながらの異国の都市に行き、そこに身を置き、大唐の深層意識と大和の文化を心身に入り交じらせたいのです。

京都に対する執念は、その長い間がたってもますます新しく、深い文化的基盤によるものです。あのような古色ただよう風情は決して一朝一夕のものではなく、瓦の一枚一枚に物語があって、実に良いのです。唐代の都、長安城が下敷きだとは言え、六朝の古都である南京を思い出してしまいます。千年の沈積はその優美さ、悲壮な美と雄壮な美を大和民族の血に深く揉み込んでいます。南禅寺の夜の雨音を聞いて、似て非なる四阿と楼閣をしげしげと見て、美しい和服を身につけ、雨の中のそぞろ歩きを体験して、食欲に京都を味わってみてはどうでしょう。「行きて水の窮まる處に到り坐して雲の起こる時を見る」暮らしも価値があると思います。

しかし私の理解と違うのは、寿岳章子が京都の「よろこび」を残さず読者に見せてくれることです。『京に暮らすよろこび』はこの街の人の温もりを解釈して、普通の人の小さな幸福をそのまま再現することで、最も自然に鮮やかに人生の百態をまとめています。

「京都交響曲」が響くとき、ある人は強い日差しの下で無駄に大きな一輪車を押して歩き、ある人は高い声でものを売り、ある人は生地をグラデーションに染め、豆粒ほどの汗も素朴な京都人がこの都市に残す一筆一画を止められません。生活必需品、文化や娯楽が生活を心から愛する人々が集まると、それは拍子木、カスタネット、和音のない輪舞曲。気運に乗じて生まれた京都は歳月の長い流れの中で生きており、有意義な人や物事を後世に伝えています。

沢田重隆の挿絵が『京に暮らすよろこび』に貢献しており、密画の筆の運びで俗世間の質朴で明るいさまざまな色を捉え、一枚一枚の絵が文字と持ちつ持たれつで引き立て合っています。思わず張挾端先生の『清明上河図』を連想しました。一枚の絵巻に俗世の暮らし向きが映し出されており、こうした温もりは心に直接届きます。あたかも繁栄し盛える開封の都で生活するようで、なんと幸せなことか。

書物を置くと、まるで精神の洗礼のようです。私達は自分の力でまだ戦火やブルドーザーに埋められていない古跡を守って、記憶の中の嗅覚と味覚を追いかけます。「人情味」の三文字が京都の生活でことこまかく体现されていることは、実にうらやましいものです。これほど充実感がある生活には、どうしてもあこがれてしまいます。

歳月は流れ、虹は止まりません。日本に行く時だと思っています。

注：

- 1、『源氏物語』紫式部
- 2、『京に暮らすよろこび』寿岳章子（著）、沢田重隆（絵）